



7月号

ひだまり

今月のエッセー

川の流れの中で

今年も夏がやってきました。私の一番好きな季節です。夏といえば、お盆にふるさとへ帰省される方が多いですが、みなさんのふるさととはどちらでしょうか？私は東京生まれ、東京育ちなのですが、実はもう一ヶ所ふるさとがあります。それは栃木です。父の実家が栃木で、毎年夏休みになると家族と一緒に遊びに行きました。都会では味わえない大自然の中、駆け回った思い出がたくさんあります。その中でも特に印象的だったのは、「やな」という場所です。

「やな」とは、川の中に竹や木をすのこ状に組んだ足場のことで、上流から流

れてきた魚がかかる漁を行う場所です。私が訪れていた栃木の「やな」では鮎漁が盛んで、流れてきた鮎を手づかみで捕まえたり、近くにある食事処では塩焼きで食べたりすることが出来ます。

鮎には川魚のイメージがあるかと思いますが、実は川と海を往来する魚です。河口付近で生まれた鮎はしばらく海の近くで過ごします。その後、川を上って、そして産卵のために再び川を下ると言われています。栃木の「やな」は鮎が往来する習性を利用したものなのです。

何よりも魅力的なのは、夏の暑い中、冷たい水しぶきを浴びながら川の中心に立って眺める景色です。すさまじい勢いで流れる川の中でも、「やな」の上なら安心して居られます。まるで水の上に立っているかのような感覚になれる場所なのです。

川の流れの中、様々な経緯を経て「やな」に入り込んだ鮎たち。自然の恵みを肌で感じ取れる「やな」を、みなさんも訪れてみてはいかがでしょうか？

◆秦 慧洲

ひだまり書房



いつでも会える

著 菊田まりこ

照りつける日差しに緑が映え、冷たい飲み物についつい手を伸ばしてしまう季節になりました。室内にいてもじっとりとした熱気でなにをするにも億劫になってしまい、気づけば時間だけが過ぎてしまうこともあると思います。

今回は、少しの時間で読める絵本を紹介します。時間を忘れるくらい夢中にさせてくれると同時に、考えさせられる物語です。犬のシロと飼い主の女の子ミキちゃんのお話は、次の一文から物語が展開していきます。

「ぼくはイヌのシロ。大好きなミキちゃんが突然いなくなった」。

「死」を犬の視点から描いた作品です。やわらかい絵と純粋な感情を書き出した文章は、読者に真っ直ぐシロの気持ちが伝わるとおもいます。「死」という概念を知らないシロは「死」をどのように受け止めたのか、また喪失感を経て、シロが得た「死」に対する気づきも興味深いところです。絵本ではありますが、子どもから大人までおすすめしたい本です。

◆きくちしもん 菊地志門

編集後記

今年の夏はどうもせつかちのよう
で、例年よりも早く梅雨前線を押し
けたかと思えば、カンカンにギラつ
いたお日様と一緒に猛暑を引き連
てきました。記録的な暑さにうんざり
してしまいましたが、こんなときこそ
元氣いっぱいになるヤツらがいます。
そう、セミです。

各地の観測結果によると、今年のセ
ミの初鳴きはいずれも平年より早く、
東北地方でも七月初頭には発生が確
認されていました。気温をそのまま音
量に変換しているかのように力強く
喚くセミ。その元氣のひとかけらでも
分けて欲しいなあと思うこの頃です。

◆山内 弾正

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗事務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

法のお話



二年度
ひさまつしやうげん
久松彰彦

合掌に見えるもの

お盆も近くなってきましたが、ご供養や法事といったお参りで欠かさずすることの一つに手を合わせることを、合掌がありますね。最近では神社のお参りブームもあり、合掌をせずお辞儀だけをされる方もいます。しかし仏事、仏様へのお参りは合掌をしてお辞儀するのが基本です。

私は毎朝ご本尊さまに手を合わせ、頭を下げています。簡単なお唱えごとをします。お唱えごとはその日によって変えることもありますが、一番簡単なものは「ありがたいございます」です。

これをするきっかけになったのはひろさちやさんという方のお話です。この方は仏教学者で、一般の方にもわかりやすい

言葉で説明されています。その中に、「お参りするときは「ありがたいございます」と心の中で唱えなさい、とおばあさんから教わったというのです。

それまではなんとなく手を合わせて頭を下げるだけだったのですが、このお話を読んでから、心の中で「ありがたいございます」と唱えるようになりました。これを見ると、なんとも言えない安心感があり、今日も頑張ろう、という気持ちになります。

この「ありがたいございます」という言葉の奥深さを感じた言葉があります。それはベトナム出身の禅僧であるティクナット・ハン師の言葉で、「一枚の紙に雲を見る」というものです。

この言葉には、一枚の紙に関わっている様々なものに思いを馳せるという意味が込められています。紙ができるまでには、材料になる木がなくてはなりません。また木が育つには土や太陽、空気や水がなくてはなりません。水も雨雲ができることによって木に届きます。

もちろん、ここには人の手も関わっているでしょう。加工する人、それを運ぶ

人、販売する人が関わり合うことで私たちは一枚の紙を手にすることができるようです。このように、たった一つのものにも多くのものが関わり合っていることを仏教では「縁起」と言います。

この「一枚の紙に雲を見る」という言葉から、合掌について考えてみたいと思います。手を合わせると、皮膚と皮膚とが触れ合う感覚があります。そしてその奥からはじんわりと手のぬくもりが感じられます。このぬくもりは、自分の身体が熱を作ってくれているから感じられるものです。そして日々食べている食事のおかげでもあります。

さらに考えてみると、このからだ両親やそのまた両親、ご先祖様が命をつないできたからこそ今の身体、このぬくもりがあるので

またこの手を合わせるという形も、お釈迦様がいらして、お釈迦様を大切に思う人がいて、その思いと形を伝える人がいたからこそできることなのです。

手を合わせるぬくもりにご先祖様を見て、手を合わせる形にお釈迦様を見る。お盆を迎えるこれからの季節に、ゆつくりと手を合わせてみてはいかがでしょうか。

こぼなし

深澤亮道の小噺

「ワッショイ！」



今回は、私の地元のお祭りを紹介いたします。私は、岩手県の花巻市というところで生まれ育ちました。花巻市は岩手県のちょうど真ん中に位置しています。宮沢賢治の出身地であり、東北屈指の温泉地としても有名です。そして花巻市には地元民がこよなく愛するお祭りがあります。それは「花巻まつり」。四百年以上の伝統と歴史を誇るお祭りですが、お米の収穫が始まる、毎年九月二週目の週末に三日間開かれます。

十数基の豪華絢爛な「風流山車」。花巻伝統芸能の「鹿踊り」や「神楽権現舞」。「花巻ばやし踊り」などで祭りを盛りたてますが、私がこのお祭りで見所としてあげたいのが「神輿」です。

岩手県外の人にはあまり知られていないお祭りですが、実は「神輿を同一会場で一斉に展示した最大数」として二〇一五年にギネス世界記録に認定されています。その数なんと一四基。地域の学校、各企業、またそれぞれ生まれ年の干支ごとの団体でそれぞれ神輿を出し合うので、昔から花巻まつりの神輿の数というのとはとても多いことでも知られていました。お祭り最終日、神輿パレードの熱気は日本のどのお祭りにも引けを取りません。

私は辰年生まれなので、大学生の頃は同じ辰年の人々が集う「花龍會」という団体に所属していました。たまたま誘われたこの団体ですが、実はちょうど干支が三回り違う父と同じ団体でした。父はすでに引退していましたが、私が小さい頃に父に連れられて参加していた時のことを覚えていた人もたくさんいて、父の知らない一面を教えてもらいながら、一緒に神輿を担ぎました。最近では、地元を離れているため参加できずにいました。しかし、父亡き今、今年こそは、父も担いだその神輿を担ぎ、祭りを盛り上げられたらと思います。「ワッショイ！」